

電話をかけてきたのは、五十歳ぐらいの女性だと思う。とても親切で、上品そうなおばさん、といった印象の声だった。

「あの……深夜、突然のお電話で申しわけございません」

その人は、まだ夜の十時だというのに、そういった。電話にでた僕に、

「絹田さんのお宅ですか、信一さんでいらっしやいますか」

と確認し、僕がそうですと答えると、

「わたし……あの、静岡の三島みしまに住んでおります、ハヤサカタエコと申します」

「はあ」

僕はそういう他なかった。ハヤサカという知りあいはいない。

「実は、お父さまのことです——」

ハヤサカさんはそういつて、黙った。鼻をすすっているような音がした。

「はい——」

「あの……こんなことを突然お電話でお知らせするのはどうかと思うのですが、お父さまはお亡なくなりになりました」

僕はそれを聞いて、また、

「はあ」

といった。自分でも間の抜けた返事だと思つて、

「そうですか」

とつけ加えてみた。だがハヤサカさんの方が僕より悲しそうで、僕の反応が鈍いことにもあまり気づかない。

「本当はもっと早くお知らせしなければいけなかったのですが……あの、お父さまが亡くなられたのは、先月の八日だったんです。わたし、なかなかお父さまの遺品に手をつける勇気が起きませんでした……きのうからようやく……」

ハヤサカさんはそこまでいつて、絶句してしまつた。どうも泣いているようだった。

「……申しわけありません、あの……。わたし、お父さまとずっと暮らさせていただいておりましたから……」

「それはお世話になりました」

僕がいうと、

「とんでもありません！ わたしの方こそ、今まで何のご挨拶あいさつもせず、本当に申しわけございません」

ハヤサカさんはあわてたような声をだした。

「それで、お父さまの遺品の中に、あなたの住所を書いたノートがあつて、わたしびっくりしてしまひまして。息子さんがいらしたなんてちっとも——」

「父は僕が二歳のときに、母と離婚したんです」

僕はいった。それから二十四年間、たったの一度も会っていない。手紙もくれたことがない。だから父親が僕の今の住所を知っていたという話すら驚きだった。

「あ、そうだったんですか……」

ハヤサカさんは、少しほっとしたようにいった。

「あの、父は何で亡くなったんですか」

僕は訊ねた。

肝臓ガンだ、とハヤサカさんは教えてくれた。五十一歳という若さだったので、ガンはあつというまに、父の体を食いつくしたらしい。

僕は変な質問だと思いつつも、亡くなるまでの父が何をしていたかを、ハヤサカさんに訊ねた。

「あの……油絵の教室をやっていたらっしゃいました」

「油絵、ですか」

「はい。それとお子さんを対象にした水彩画の教室も……」

ハヤサカさんはいった。

「いつ頃からでしょうか」

「この七年はど……。わたしがごいつしよさせていたからはずっと——」

「そうですか」

「あの……絹田さん、お母さまは」

おそろおそろといったようすでハヤサカさんは訊ねた。

「あ、亡くなりました。二年前です。交通事故で……」

「まあ」

ハヤサカさんは息を呑んだ。その死んだ母は、死ぬまでことあることに父を罵っていたとは、僕はいわなかった。

「で、絹田さんにご兄弟は？」

「いません」

「まあ……」

また、ハヤサカさんはいった。それを聞き、そうか僕は独りぼっちになったんだな、と改めて思った。だが、母親が死んでからは、ずっと独りぼっちだと思ってきた。

母は、いつも、あなたのお父さんはろくでなしだった。だからきつと今頃はどこかで野垂れ死んでいる、といいつづけていた。息子に向かって、母親が父親についていうセリフではないと思うのだが、たった二歳の僕を母親のもとにおいて、他の女と駆け落ちしてしまった父のことを、母はそれこそ死ぬまで恨みつづけていた。

僕は、母と母の両親に育てられた。祖父と祖母は、僕が十九と二十のときに、あいついで亡くなった。そして僕が専門学校を卒業して家をでると、母はこれからが自分の本当の青春時代だとかいって、あちこちを旅行してまわっていた。その旅先、メキシコのチュアナで、乗っていた観

光バスが列車と衝突して亡くなったのだ。

「心配なく。もう、ずっとひとり暮らししていますから」

僕はいった。

「それより父がすっかりご厄介やづかいをかけたみたいで、ありがとうございました」

「いいえ。そんな……そんなことおっしゃられたらわたし……どうしていいか……」

ハヤサカさんはそういつて、またひとしきり泣いた。母にはろくでなしだったかもしれないが、このハヤサカさんにはそんなに悪い人ではなかったのだろう。僕は父のことを思って、少しほつとした。

「あの……それでお墓のことなんですが……」

「ああ——」

僕はいった。母の墓は、祖父母と同じ、新宿しんじゅくの百人町ひゃくにんちやうのお寺にある。

「実は、お父さまのご遺言で、こちらの海の見える高台のお寺に入れさせていたで……」

「あ、けっこうです、それで。父が入りたがったところがいちばんだと思いますから」

我ながらあっさりしすぎているかなと思いつながらも、僕はそう答えた。実際、母親の隣りなかに入れたら、怒って化ばけてでてきそうだ。それに、このハヤサカさんならきつと熱心にお墓参りをしてくれるにちがいない。

「よろしいんですか。わたし、あの、本当に勝手なことをしてしまったと思って、どうしようかと——」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。